

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に2006年11月に設立されました。また、日中韓を中心に活動する「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員寄稿記事.....	3
➤ 研究・事例紹介.....	11
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	12
➤ 会議・イベント案内.....	13
➤ 書籍等の紹介.....	13
➤ 会員募集中.....	14

## 巻頭書記

各地で記録的な豪雨が発生するなど不安定な天気が続いており、自然の恩恵と自然の猛威が隣り合わせであることに改めて気づかされます。水害等に遭われた方々へお見舞い申し上げます。

本号では、JRRN 会員撮影による『桜の水辺風景 2012 写真集』の発行、英国河川再生センター (RRC) の河川再生モニタリング手引き PRAGMO (日本語翻訳版) 作成企画 及び JRRN 会員への翻訳ボランティア

募集についてお知らせします。また、JRRN 会員からの寄稿記事として、川系男子の『川と人』めぐり No.3 (小野川編)、国際河川シンポジウム (IRS) のご案内、「水辺からのメッセージ No.38 (日比谷公園編)」を掲載しております。

JRRN 活動の更なる展開に向けて、JRRN 会員参加型による活動を企画してまいりますので、皆様方のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

## JRRN 事務局からのお知らせ(1)

### 『桜の水辺風景 2012 写真集』発行のお知らせ

水辺の美しさや人々との関わりについて考えるきっかけづくりを目指して始めた『桜のある水辺』の風景写真の募集は、今年で3回目となります。

回を追う毎に応募いただく写真の数は増え、この度は、17名の方より43点もの素敵なお写真をご提供頂きました。惜しむらくは、過去3回で四国地方の写真の応募がないことです。

なお、皆様からご応募頂きました桜のある水辺風景写真を通じて、水辺の魅力や美しい日本の春を再認識することができました。この度、ご応募頂きました皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続き JRRN に皆様からのご協力・ご尽力いただけますようお願い申し上げます。

応募いただきましたお写真とコメントは『桜のある水辺風景 2012』写真集』として取りまとめ、6月20日(水)より JRRN のホームページにおいて PDF ファイル形式で公開させていただきます。

#### ◆公開先

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/>

今後の JRRN の活動の参考といたしたく、この度の写真集についてのご感想を JRRN 事務局までお寄せ下さい。

([info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net))

また、次回桜のある水辺風景写真の募集の際には、四国からの春のお便りもお待ちしております。



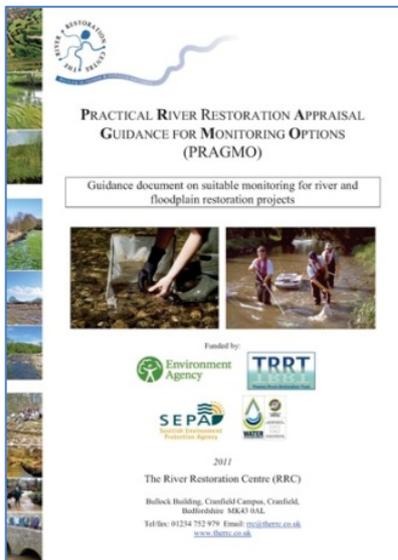
(JRRN 事務局・伊藤将文)

## JRRN 事務局からのお知らせ(2)

### 河川再生モニタリング手引き PRAGMO(日本語翻訳版)作成企画 及び 翻訳ボランティア募集

JRRN では、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的とした様々な活動を実施しております。そして、今回の企画では、昨年 11 月に英国河川再生センター (RRC) にて発行された河川再生モニタリング手引き「PRAGMO」を、JRRN 会員のご協力を得て日本語版に翻訳・普及することとしました (PRAGMO の概要については、11 頁をご参照ください)。

また、PRAGMO 日本語版の完成 (本年秋予定) に合わせて、英国河川再生センターから講師を招いた講演行事を東京で開催し、本書の普及・宣伝を行うとともに、本書を通じて河川再生目標の設定やその実現に向けたモニタリング手法等について意見交換を行い、本書の日本国内での実用化を目指します。



河川再生モニタリング手引き「PRAGMO」  
(英国河川再生センターHP で無料公開)

[http://www.therrc.co.uk/rrc\\_pragmo.php](http://www.therrc.co.uk/rrc_pragmo.php)

つきましては、JRRN 事務局スタッフとともに PRAGMO を翻訳 (英文和訳) してくださる方を募集致します。

日本語版編集作業に際しては、PRAGMO 発行元である英国河川再生センターの全面協力を得るとともに、日本語版冊子の発行及び普及は (財) 河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けて実施致します。右記募集要項をご確認の上、皆様からのご参加をお待ちしております。

#### 【執筆要項】

##### ①翻訳作業方法

事前の打合せ (メール協議) により翻訳分担を定めた上、JRRN 事務局より英語のテキスト原稿を電子メールにてお送りします。お送りした英文原稿を日本語に翻訳して頂き、メールにて JRRN 事務局にお送りください。なお、最終チェックは監修者 (筑波大学 白川直樹准教授 (JRRN 技術委員)) 及び JRRN 事務局が実施致します。

##### ②募集人数 複数名

##### ③応募条件

1. JRRN 個人会員、もしくは JRRN 団体会員に所属する個人の方。
2. 英語を日本語に翻訳 (英文和訳) できる方。
3. E-mail が使えること。

##### ④待遇 無給

##### ⑤作業量 1人あたり英文原稿 20 頁程度の翻訳作業を想定 (頁数は目安であり、事前打合せで調整させていただきます)

##### ⑥作業場所 在宅作業 (JRRN 事務局にお越しいただく必要はございません)

##### ⑦作業期間 7 月後半～9 月中旬頃までの期間

##### ⑧応募方法 下記連絡先まで、電子メールにてご応募ください。

##### ⑨応募期間 2012 年 7 月 2 日 (月) ～10 日 (火)

##### ⑩ボランティア特典

1. 日本語版の翻訳者欄に、氏名・担当箇所・プロフィール等を掲載させていただきます。
2. 日本語版冊子 1 部を謹呈します。(電子版を JRRN ウェブサイト上に無償公開)
3. 英国河川再生センター講師を招聘した講演行事 (本年秋開催予定) において参加者にご紹介させていただきます。  
(但し、本行事参加のための旅費等は自己負担とさせていただきます)

#### 【連絡先・問合せ】

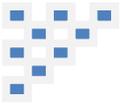
日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN) 事務局  
担当: 後藤・伊藤

〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号  
新川中央ビル 7 階

公益財団法人リバーフロント研究所内

電話: 03-6228-3862 e-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net)

(JRRN 事務局・後藤勝洋)



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 3 ～小野川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

### 1. ほたるの舞う夕べに

2012年6月19日。夏至も近づく蒸し暑い夕暮れ時にほたる狩りを決行した。ホタルは初夏の少し蒸し暑い日の日没2時間後(8時あたり)が最も飛ぶ。同郷の大学の友人とともにいざ出発。彼は高校時代からの川同盟の盟友の一人で、高校時代一緒に遠賀川で活動した(実は同じ大学内に当時の盟友が3人いる)。遠賀川の実験河川にホタルを飛ばす計画を立てたのが懐かしい。他にも、ホタルをめぐる思い出はその時々たくさんある。夕暮れの車内で様々な思い出が頭をよぎった。

### 2. 光の記憶(幼少期回想)

真っ暗闇の峠道を父は車を走らせた。「ついたぞ。」車のライト以外の明かりはなく、辺りは闇に包まれていた。水の流れる音が近くで聞こえる。「クワッ、クワッ、クワッ・・・」とカエルの鳴き声の不気味でそれを助長するように時々山の木がぞわっと揺れる。弟に至っては泣き出す始末。

父と母はそんなことお構いなしにどんどん暗闇の中を進んでいく。じっとしていたらもっと怖いのでしかたなく後ろからついていく。父の後ろから藪をかき分け進む。この時期いつもは半ズボンなのに、でかける前に母が長袖と長ズボンを僕に履かせた意味がやっと分かった。

身長より大きな背丈の藪をかき分けると開けた橋の上にてた(図1)。思わず宙を仰いだ。

河原に数えきれない光が舞っている。水面を照らす光、木を照らす光、夜空を照らす光……。一つ一つの光が僕の目に映りこんだ。さっきまでの不気味さはもうどこかへ消えており、懸命にジャンプして光に手を伸ばした。父が網を振り回す度に網の中の光が大きくなっていき、振り回す度に光の残像が綺麗だった。「お母さん、その虫かごとって！」母が虫かごを持ち、僕に渡そうとした時、手を滑らせ、思わず川の中へ落してしまった。辺りは暗かったののでどこを虫かごが流れているかも見えない状況で、闇に消えた。

お気に入りの虫かごに網いっぱいホタルを入れるはずだったことがもう叶わないと思うと悔しくてわんわん泣いた。「あゝあゝあゝあゝあゝ——！！おがーさんのせい！！はやぐもぐってとっでぎでええええ！！！」と兄弟そろって大泣き。「ごめんごめん、わざとじゃないとよ・・・。」と謝る母に、「ばかたれ！お母さんまで流されたらどうすとか！」と一喝する父。「それにホタルは命が短いけん、

持って帰ってもすぐ死ぬとぞ。虫かごはまた買ってやるけん、逃がして帰るばい。」悔しくて悔しくて諦めきれず、手の中にこっそり握りしめ、1匹だけ持ち帰った。

家についてずっと握りしめていた手の平を広げると、臭かった。苔の匂いとか土の匂いとか独特の匂いがした。家の中に放すと「あー、あー」と父と母が言ったが、母が砂糖水を作ってくれた。「ホタルは大人になったら水しか飲まんけど、甘い水が好きなんよ。」ティッシュに湿らせた砂糖水をホタルに近づけるとじっとティッシュにつかまった。川ほど盛大な光ではないが、じわーっと1匹が淡く光るのも綺麗だった。

毎日、新しい砂糖水を作っては、ホタルに飲ませた。ホタルは毎日ティッシュにつかまっては光ってみせたが1週間くらい経つと光が弱くなってきた。砂糖水が足りないのかと思いでんどん作るが弱くなるばかり。ある朝ティッシュから転がり落ちて固まっていた。捕まえてきてから余命10日間。切ない命だった。それから毎年ホタルを見に行くのが僕の楽しみになった。次の年も見に行った。ただ去年とちよっと違うのは虫取り網も虫かごも持ってないこと。



図1：小学生時代に描いたほたる絵

### 3. 逆さ蛍さんとの出会い(中学時代回想)

中学校に入学してから担任の理科の先生の勧誘で新設の科学部に入った。顧問の先生が北九州市立自然史友の会の水生部会の会長をしていたので、休みの日は水生生物の野外観察会によく出かけた。

ある観察会の時、車で一緒になった一人のおじいさんと知り合いになった。初めて名刺というものをもらい、名刺をみると、元大学教授で農学博士と書いてあった。博士という肩書がなんだかかっよく

て、山岡誠先生に色々話を聞いた。山岡先生は宗像市のホテルの会の会長をしているらしく、大学を退いてからはずっとホテルの研究をしているらしい。

「僕はホテルが好きすぎてね、毎日観察してきたら最近では、自分までホテルに似てきたんだよ。今では、『逆さ蛍』と言われているよ！はっはっは！」最初、どうして『逆さ蛍』なのかよくわからなかったが、後で渾身のギャグだったことが分かったと、もう笑いをこらえるのに必死だった。「君、♪ほー、ほーたる来い、こっちの水は甘いぞ、あっちの水は苦いぞ〜って聞いたことあるでしょ？僕はね、あれ本当だと思うんだ。」たしかに昔、ホテルにティッシュに湿らせた甘い水を与えた時には飲んだ。「それだけじゃなくてね、ホテルは甘い水を飲むと普通より長生きするんだよ！僕はね、今それを研究している。」先生の主張はこうだ。ホテルに糖液を摂取させると、通常より生存日数が10日近く延び、さらに産卵数も2倍以上に増えるという（山岡，2000）（表1，2）。しかし、学会で猛烈に批判を浴びたという。「自然界で生きているものに砂糖を与えるのはちよっと・・・」とか「ホテルは水しか飲まないのに甘い、苦いなんて関係ないのでは・・・」などほたる歌をヒントにしたという部分で批判を集めたようだ。

しかし、砂糖水を与えると生存日数、産卵数ともに増えることは事実。これを自然界に応用して考えることに。すると一つの可能性に気づいたという。植物には朝露などができる。植物から染み出すなんらかの物質も砂糖水と同じ効果がないか今調べているところらしい。

僕はこの時初めて研究者というものに憧れた。自分の持った仮説をどう証明するか日夜考える。僕は山岡先生にもっといろいろ聞きたくて夢中で話を聞いた。すると先生が、「宗像に僕が管理している『ほたるの館』って建物があるから見においで。ホテルもいっぱい飼育しているから飼育方法教えてあげるよ。」

翌週、僕はほたるの館へ伺った。周囲には川があり、河原や植物が繁茂した水辺があった。館の中にはいると、たくさん水槽が並んでいて、ホテルの幼虫、成虫、そして、AとかBとか書いたシールの貼られた水槽がたくさんあった。

「こっちのは水のみ投与の個体のはいった水槽、こっちのは糖液を与えている個体に入った水槽。そしてこの水の中にはいるのは幼虫。卵から孵化させたんだよ。君にも飼育方法を教えてやるから家で試してみなさい。」さらに先生は「とにかく毎日観察しなさい。毎日見ていると、毎日なにか違うことを発見できるから。そう、私みたいに毎日観察しているとだんだんホテルに似てくるけどね！はっはっはっ！」

さっそくその日から僕の部屋は実験部屋になった。100円均一で買い揃えてきたプラスチックケースと植木鉢の下に敷く網、針金そしてエアープンプ。細かくは省略するが、毎日観察を続けた。先生が水のみと糖液摂取の2つで実験したのと同じように実験

した。すると、やはり水のみは寿命が短かったのに対し、糖液摂取は10日以上長く生きた。さらに産卵にも成功し、両方の産卵数を比較すると、糖液摂取の個体のほうが水のみ個体より産卵数が2倍以上になった。

毎日見ているとホテル1匹1匹の微妙な大きさや形の稚貝が分かるようになり、愛着すら湧いてくる。いつか僕もホテルが舞う水辺をつくろう。

表1 生存日数の比較（山岡，2000）

水のみ投与							糖液投与						
月日	雄			雌			月日	雄			雌		
	死亡	生存日数	延べ生存日数	死亡	生存日数	延べ生存日数		死亡	生存日数	延べ生存日数	死亡	生存日数	延べ生存日数
6/5	1	3	3				6/14				1	12	12
6/6				1	4	4	16				1	14	14
6/9				1	7	7	19	1	17	17	2	17	17
10				2	8	16	20				2	18	18
14				1	12	12	21				1	19	19
15				1	13	13	22	1	20	20	2	20	20
16				1	14	14	23				2	21	21
17	3	15	45	1	15	15	26	2	24	48	1	24	24
18				3	16	48	29	1	27	27			
19	1	17	17				7/14				1	42	42
21				1	19	19							
25				1	23	23							
合計	(5)		(65)	13		171	合計	5		112	13		263
平均	1雄		(13.0)	1雌		13.2	平均	1雄		22.4	1雌		20.2
全体	1匹	生存日数	(13.1日)	13.7日			全体	1匹	生存日数	20.8日			

表2 幼虫羽化数（山岡，2000）

月日	気温℃	孵化幼虫数	
		水のみ投与	糖液投与
6/30	22	71	5
7/2	22	280	535
3	22	301	354
4	22	482	200
5	22	378	267
6	22	126	657
7	23	54	356
8	24	59	532
9	24	45	203
10	24	39	344
12	23	66	473
13	23	16	218
15	23	26	366
17	24	11	478
18	24	0	184
19	24	3	212
20	24		83
21	24		49
22	25		33
23	26		22
24	26		12
25	26		11
26	26		4
27	25		4
29	26		2
8/3	26		1
合計		1958(4雄分)	5605(5雄分)
1雄 当り		489.5	1121.0

#### 4. ほたる君の高校時代（高校時代回想）

高校に入学し、GWの宿題で弁論大会の作文を書いてこいと、なんとも面倒な課題がでた。連休最終日に課題が終わってないことに気づき、なにか適当にかけるところをと考えて慌てて書いた「ほー、ほー、ほーたる来い。」と綴った作文がまさかの学年の代表作文に。文化祭でほたる歌を披露して以来、学校ではいつの間にか「ほたる君」と呼ばれるようになった。

それから僕的には色々あったのだが、長くなるので省略し、高校2年生の11月。別の高校に通うほたる少女に会う。彼女は小さい頃よりホタルを自宅で繁殖させてきた生粋のホタル好き。YNHC（青少年博物学会）という高校生でつくるネットワークを立ち上げ、そこから僕らのほたるプロジェクトは動き出した。最初は2人だった仲間もいつの間にか10人以上に。類は友呼ぶとはよく言ったもので、ホタル好きを皮切りに、石好き、水草好き、星好き、機械好きなど様々な趣向の仲間がそろった。そんな変わり者集団が対象にしたのがホタルだった。活動する河川学習館のそばに本川から導流堤の上に水をくみ上げた実験河川があり、そこにホタルを飛ばそうという計画。よく、「ほたるの飛ぶ川に」なんてキャッチフレーズを耳にするが、いったいどういう川だとホタルが飛ぶのか試してみようということから。計画を進めるためには周囲の反対も多く受けた。「ホタルがもともといない川に飛ばすのは間違っている。」「ホタルの養殖がどれだけ大変かわかってるのか？」などなど。しかし反対されればなんとしてもやりたくなるのが性。「あくまで実験的にやることに意味があるんです！」と僕も譲らなかった（この頃から、「へなへなしてる癖に頑固」と言われるようになってしまった）。

手始めに川にホタルを取りに行ったのだが問題が発生した。ホタルの会のおじいさんの話によると、ホタルには帰巢本能があり、自身の育った川以外で成虫を放流しても、上空に舞い上がってしまい、定着しないらしい。（ある町のお祭りで大量にホタルをお堀に放流したらしいが離れた途端、みるみる舞い上がっていき消えてしまったことがあったらしい。）ホタルを定着させるには幼虫の時代からその川で定着させ、その川で育てることが重要という。しかし今からホタルを育てていたのでは来年に幼虫を放流させなければならず、飛ぶのはその1年後ということになり、みんな高校を卒業してしまい、ここでホタルを確認できない。

ホタルがなんとかここで産卵してくれないかと考えた末にひねり出した秘策がホタル小屋作戦だった（写真1。2）。川の天井にアーチ状に寒冷紗を張ってホタル小屋をつくり、その中に捕まえてきたホタルを離す。うまくいけば産卵してくれるはず。作戦は見事うまくいった。寒冷紗の天井からぶら下げたスポンジに小さな卵が確認できた。孵化すれば、そのまま川の中に落ち、そこでカワニナを食べ、陸上

に上陸し蛹になり、翌年のこの時期に孵化して舞うはずだ。

翌年、若干ではあったが、ホタルは舞った。散歩のおじさんが「ありゃ、こんなところにホタルが・・・」と驚いていた。それからカワニナの増加、木陰づくり、柔らかい土づくりなど改善点を追加し、後輩が引き継いでいる。とりあえず僕らの最初のホタルプロジェクトは第一次段階をクリアすることができた。



写真1 ほたる小屋制作（2005）



写真2 ほたる小屋に産卵床を設置（2005）

#### 5. 放課後の研究室（昨年のほたる狩り回想）

2011年6月20日。夏至の今日は真夏日の30度を超える気温になり、夕暮れ時研究室でK君と話していると、ふと、涼を求めたくなった。思い立ったがなんとやら、白川先生の研究室の扉をノックして開けるや否や「先生！ホタル観に行きたいです！」とストレートな僕ら。それにすかさず白川先生。「いいよ！じゃあ、今から行くかい？」これが白川研究室『川と人』ゼミ、思いつきも早ければ、行動も早い。

研究室を開けてさっそく先生の車で出発。車中でホタルに関する幼少期の思い出話をすると、よく見に行っていた人もいれば、飛んでいる姿をみたことがない人も。白川先生は庭先にホタルが舞っていて川に見に行くまでもなかったとか。故郷の川の記憶

とは、幼少期のホタル川の体験は自身のアイデンティティ形成としても重要なものかもしれない。

そんな話をしながら、筑波山を抜け、恋瀬川の上流域の水辺へ到着。条件的にはホタルが最も舞う 8 時頃で、気温も高く、少し蒸していて申し分ない夜だが、果たしてそんなにすぐいるものかどうか思いながら、下車して水辺へ。田んぼでカエルが大合唱する中、畔の暗闇に目を凝らす。「いたっ！」小さいながらも時々力強く輝く光が草陰を飛び出し、宙を舞う。「あ！こっちにも！あそこにも！」しばらくすると、あちこちから登場しはじめた。手のひらの中にそっと光を入れてみると、ここの主役はヘイケボタル達であることが分かった。体長は 3~4mm ほどと小さいが、時々体から息をしばり出すように力強く光る。地上での 7 日間の命の輝きはこんなにも美しく、儂いものか。手のひらを開くと、光は宙を舞い、再び闇の中に消えた。

ホタルを放して、ふと目がいったのは、畔の水路には飛んでいるのにすぐ脇の川には飛んでいないこと。その後、川も少し下ってみるが、見つからず。同じように見える環境の水辺なのに何が違うのか？暗くてよく見えなかったが、護岸が直線的なのがいけないのか、水量や水質が原因なのかは謎だが、事実として記憶に留めておきたいと思う。

再び山を越え、今度は桜川の支流へ。ゼミの K 君の活動している環境 NPO がここら一体を保全しているらしい。水辺一帯は河畔林で覆われ、枝葉が風にそよぐ。再び目を暗闇に。

枝葉の間から合図を送りあう光があちらこちらの木に。12 月のクリスマスツリーのイルミネーションとまではいかないが、夏のクリスマスツリーといったところだろうか。

視界を仰ぐと僕の真上を飛び交う光がいくつかあったので、手を伸ばす。ここの主役はゲンジボタルとヘイケボタルの 2 種類のようなようだ。大学から少し離れたところにこんなところがあったなんて知らなかった。ひっそりと木々の間で光りあう主役たちをいつまでも光を眺めていたかった。

今回急遽、ホタル狩りに行ったが、ホタルの数は全体的に少ない印象を受けた。昼間にみている川と想像していた場所でも夜、川にきてみると、状況が違う無機質な一面をみることもしばしば。僕は一体、川の何をみていたのかとってしまう。

そういえば、昔小学校の音楽の時間にでてきた蛍歌の歌詞がふと頭に浮かんだのでどんな歌詞の歌だったか検索してみた(図 2)。(今は CD は絶版。どなたかこの CD をお持ちの方いたらぜひご連絡いただきたい。)

小学生ながら、なんとなく印象に残る歌詞で未だに歌える自分に驚き。川を学んでいる今だからこそこの歌詞の真意が良く分かるし、後半に進むに連れて悲しいし、少し恐ろしい。

そうそう、この歌詞ではないが、ホタル狩りの道中、僕はたしかに、闇の中であの光をみた。しかし、

車から降りて、辺りをどれだけ探してもみつからず。途中車酔いをして、外を見ていた僕が幻覚をみたのか？いや、違う。たしかにあれはホタルだった。

ホタル、おまえはどこへ行ったのか。

ほたる	作詞 結城 大彦
	作曲 葛西 友彦
1. 闇に白く ほたる飛び交い 人の群に 追われて逃げた 水は流れる 草の葉そよぐ 闇の中に おまえはもういない	
2. あれから誰が おまえを見たらう 夏はいくつも 通りすぎたけど 水は今では 流れていない 草の葉だけが 風に鳴っている	
3. ほたるおまえは どこへ行ったのか もう戻っては 来ないのだろうか きれいな水と 緑を守る 声がこんなに大きくなったのに	
今では誰も お前を知らない 誰も姿を 見ることもない 今は草の葉 音さえたえず 闇が深く 眠っているだけに 声がこんなに大きくなったのに	

図 2 『ほたる』歌詞

## 6. 今年のほたるは小野川流域へ

「地元ではホタルなんて、どこにでも飛んでいたのに、いまや車を走らせてわざわざ見に行くとはねえ」と友人。そうは言ってもやはりシーズンがくるとどこにいても見に行きたくなってしまふ。車を走らせて約 20 分。牛久市に到着。目撃情報を聞いたことがあったので行ってみた。牛久自然観察の森の近くの田んぼと森の境目の水路に飛ぶらしい。付近には霞ヶ浦の流入河川、小野川が流れている(写真 3)。

ここら一帯は稲敷台地と呼ばれ、約 15 万年前に海が隆起してできた地形で、小野川によって徐々に浸食されて低地と台地の境目がわかる。一帯はビートルズトレイルという愛称で呼ばれている。

車を止めて歩くとすぐに見つかった。噂通り、田んぼと森の境目の水路(写真 4)に乱舞している。着いた時は 8 時過ぎで、8 時半くらいになるとホタルの飛来数も倍増した。掌の中に光をつかんだ。この強い光はゲンジボタルのオス。光に顔を近づけるとホタル特融の苔むした土のような匂いがする。自身の年齢を忘れ、一時の間、光に手を伸ばして飛び跳ねた。

山際の水路だけでなく、小野川周辺も探してみようと、田んぼ道を抜け、小野川本川まで近づいてみたが、本川には一匹も飛んでいなかった。たくさん飛んでいた山際の水路とは、山際水路からほとんど距離は離れていないのに、大分環境が違うようだ。考えられる要因としては、小野川本川は農業用水としての利用が多く、川の透明度も高くない。河床が泥質になっており、ホタルのエサになるカワニナの生育に適していないことが考えられる。対して山際の水路は台地の切れ目になっていることから湧水が染み出しており、水質的にも良好でカワニナの生育にも適していると考えられる。わずかな環境の変化に応答しているのは非常に興味深い。これは私の経

験に基づく推測に過ぎないが、茨城県（関東平野）では平野部の河川ではホタルの生息数が少ないように思う。なにが影響しているかははっきりしたことは分からないが、他の箇所を見に行ってもまばらであることが多い。

24年間生きてきて、その時々目に映ってきたホタルの光。幸いにもホタルの飛ぶ環境で育ってきた。たった数週間しか見ることができないが来年もどこの川で誰かとホタルを見たい。

あと、ホタルを目の前に年甲斐にもなくはしゃぎ過ぎ、デジカメを落としてしまい、暗闇の中で探し続けたのはここだけの秘密。



写真3 小野川（茨城県牛久市）



写真4 ホタルの飛ぶ山際の水路

#### 参考文献

山岡誠：ゲンジボタルの糖液摂取の影響，全国ホタル研究会誌 第33巻 pp. 21-22, 2000.

#### 背景挿絵

さわやか信州 net

[http://www.nagano-tabi.net/modules/enjoy/enjoy\\_34010002.html](http://www.nagano-tabi.net/modules/enjoy/enjoy_34010002.html)(最終閲覧日：2012年6月25日)

#### 【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代には YNHC（青少年博物学会）、大学時代では JOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢めている。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『郊外の湖沼・河川流域における社会変化に伴う流域管理のあり方に関して』と題し、流域の水質・水量の将来予測や河川市民団体の特性について研究中。最近のお気に入りには夏に向けて川めぐりの計画を立てること。



## 会員寄稿記事(2)

### 国際河川シンポジウム(IRS)のご案内

寄稿者：都筑良明（島根大学汽水域研究センター 協力研究員・JRRN 会員）

#### 1. 概要

オーストラリアで開催されている国際河川シンポジウム（International Riversymposium, IRS）についてご案内させていただきます。今年（2012年）は15回目、メルボルンで10月8～11日に開催予定です（<http://riversymposium.com/>）。興味がありそうな方にこの情報をお送りいただければと思います。

主催者である International River Foundation (IRF) のバックには、Thiess というエンジニアリング会社がついていて15年間 IRS を支えてきたようです。現在は、政府・州機関等もバックアップしていて、他にも様々なスポンサーがついています。学術関連ではオーストラリアの4大学が主要なメンバーとなっていてこれらの大学間の連携という側面もあるようです。

IRS の特徴は研究者のみではなく、行政、環境（河川、流域）NGO 等が多数参加していることで、学術的な研究、実際の河川・流域管理プロジェクトの両方が対象となっています。河川管理の体制、ソフトな側面等、学ぶところも多いと思います。

#### 2. 参加者

主な参加者は、上記のように河川関係の研究者、国・自治体関係者、企業、環境 NGO です。

全体の発表件数はオーストラリアからが多いのですが、参加者全体の構成は、英連邦、アメリカ、中国、インドネシア等の周辺国の他、ヨーロッパ、アフリカからも参加者がいます。

日本人からの参加者（発表件数）は、2006年頃は補助金も出ていて10人程度は参加していたようですが、ここ数年は2～3人（件）程度、昨年は1人（件）のようです。

ARRN は、日中韓の枠組みを軸に、東南アジアにネットワークの範囲を広げようとしているところがあるようです。一方で、IRS には中国からは中豪が連携するプロジェクトの関係で10名単位の参加があり、韓国からは4大河川事業に関連してキーノートスピーチがあることから、中韓は IRS にも、それぞれ力を入れているようですので、ここ数年は、日本のプレゼンスの少なさが目立つような感じがあります。

当然のことながら、会議の公用語は英語ですので、自治体や環境 NGO の方が参加しようとする、現実には言葉の壁も大きいでしょう。たまたま留学帰り、帰国子女の方が活動に関わっているような流域に期待するというのも1つの方法でしょう。最近では、学校教育でいわゆる使える英語の教育が行われているようですから、その辺に少しは期待できるのかもしれませんが、国内で英語を習得された方でも十分に参加いただけると思います。

#### 3. 開催地

2009年まではブリスベンで開催されていて、2010年初めてブリスベンから離れパースで開催され、2011年ブリスベン、2012年メルボルンというような開催地となっています。これらの新しい場所での開催は、オーストラリア国内でも IRS の輪を広げようとしているようで、パース開催の際には西オーストラリア州からの参加者が多かったです。

#### 4. Riverprize

Riverprize という賞が、国際、国内（オーストラリア）、1件ずつ授与されます。国際の賞金は昨年は35万豪ドル（約2,800万円）で、受賞した流域は途上国のどこかの河川流域と共同プロジェクトを行うことも課せられるという仕組みになっています。したがって、受賞賞金を全額自分たちの活動や渡航・参加費用に使えるという訳ではありません。しかしながら、日本の自治体や環境 NGO は、活動予算が限られたり、使途が限定されたりという制約があるところが多いでしょうから、流域で応募主体をうまく形成して、応募し、予選を通過し、本選でのプレゼンを経て受賞することができればの話ではありますが、活動予算を充実させることが可能になるのではないかと思います。それには、個人的には、日本から毎年のようにどこかの流域が応募して発表しているというような雰囲気作りが重要であると考えられます。数十億、数百億単位、あるいはそれ以上の巨額の事業予算を担当されている国交省の意向も気になるところです。

既に昨年のニュースレター等で紹介されているように（「7. 参考資料」参照）、2000年には鶴見川が応募し、本会議でのプレゼンテーション（4河川程度が IRS でプレゼンを行うことができる）まで行ったことがあるようです。RiverPrize は、今年から1次予選、2次予選という形式になっています。1次予選を通過した河川が発表となったところで、国際はアメリカの河川が複数選ばれている他、モンゴルからも予選通過があったようです。

#### 5. 参加申し込み等

今年の発表（口頭、ポスター）については、2012年2月に発表の募集締切があり、4月に採否の連絡がありました。

Riverprize は、2011年12月に募集開始、2012年3月に1次募集締め切りという日程でした。

発表申し込みは締め切られています。参加については、現在、ホームページで受け付けているところです。メルボルン滞在の方に案内していただいても良いのか

もしもありません。参加費は国際会議価格で、一般の場合には7月11日までの登録のアーリーバードは1050豪ドル(約8.4万円)、それ以降は1500豪ドル(約12万円)と少しお高いですが、発表者、環境NGO、学生の参加費も設けられています。

#### 6. 今後の日本としての対応についての個人的見解

昨年、会場で、IRFの方が、日本からも応募してほしいということをおっしゃっていましたので、いくつかの流域の関係者の方々に声かけをしてきたつもりですが、予算が厳しい、活動が忙しく海外で発表するような余裕はないという状況のところが多いようで、なかなか前向きな返事はもらえない状況です。震災後というタイミングも、あまり良くないのかもしれない。実務やNGOの人たちが参加するシンポジウム、特に国際会議という日本ではまだ馴染みがないのかもしれない。

このような状況ですので、IRSについて、河川や水工、気象等の専門家の方々がうまく情報を広めていただきつつ、今後は自治体、環境NGO等の参加に対応できるように参加者用の予算の枠組み等についても考えていただければと思っています。今年はこれからの準備では難しいかもしれませんが、来年の予算取りを考えるとこの時期に情報を流しておくことが効果的だと思いますので、情報提供しておきます。なお、途上国からの参加については、主催者が渡航費用、参加費用を負担するという仕組みもありますが、日本は対象外ですので、参加には旅費、参加費等を機関あるいは自己負担していただくことが必要です(注1)。

河川工学分野で海外への進出を画策されているゼネコン、コンサル等には情報収集、人脈づくり等の良い機会になるのかもしれない。

JRRN, ARRN等の枠組みで、河川環境改善についての検討、情報の整理等が進められています。従来から言われていることかもしれませんが、日本の1つの問題点として、河川環境を考えたり関心を持ったりする人に、負担が大きいシステムが出来上がってしまっているような気がします。環境NGO等が海外のように経済活動を行う主体になるような規模(組織や会計)にまでなることが困難な状況があり、それには税制等を変えていく必要があるということは数十年前から議論されていますが改善は非常にゆっくりとした速度でしか進んでいないという状況もあると思います。このような問題点の解決、改善には、行政の上の方に動いてもらわないと、全体的な仕組みは変わらないという側面もあります。地方分権の動きもあるようですので、NGO問題も併せて考えていただければと思います。大枠が変わらない状況の中では、改善を試み、予算だとか、自分たちの仕事の枠組みを改善するようなことを考えると、個人の負担が増大し、残業ばかりが増えてしまうというような状況にもなりかねず、人件費削減の傾向がある中ではそれを批判されるようなことに

もなりかねません。

そのような意味では、数年前から行われるようになってきた仕分けのフレームワークをうまく活用していくというのが1つの方法なのかもしれません。しかしながら、必ずしも政治的にやれば良いというのではなく、ダムの話にしても合理的な議論、そのための場づくりが必要なのではないかと思います。そのような側面で、日本の流れが、世界の流れと違う方に行きかけている部分があるというのは、筆者の誤解であればとも思っています。千葉県で数年前に行われていた三番瀬の円卓会議の議論も、最近ではあまり耳にしなくなり、従来型の行政主体の検討方式に戻っているような気がします。一方で、地方によっては、市民参加の新しい枠組みが生まれているところもあるようです。

#### 7. 参考資料

JRRNのHPに参加報告等があります。

- (1) [http://www.a-rr.net/jp/info/letter/docs/Newsletter-vol41\\_201011.pdf](http://www.a-rr.net/jp/info/letter/docs/Newsletter-vol41_201011.pdf) 2010年の参加報告(JRRN 和田氏) ニュースレターの3ページ
- (2) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/16> (2010年参加報告)
- (3) <http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/99> (2010年 abstract 集等)
- (4) <http://www.a-rr.net/jp/exchange/docs/14ri-versymposiumreport.pdf> 2011年の参加報告(都筑)

#### (注1)

参加費用については、日本の現在の税制では、給与所得者の方はみなし必要経費の方法が用いられていて、例えば、収入と所得の関係は、1,000万円では780万円、800万円では600万円、600万円では426万円、400万円では266万円と算定されますから、これらの差額の、220万円、200万円、174万円、134万円は必要経費として算定されている訳です。図書、資料、スーツや靴を購入したり、講習会に参加したりする他に、たまには自費で(税務的にはみなし必要経費とされてきたけれども、これまでは、それ程は使ってこなかったかもしれない必要経費分を活用して)このようなシンポジウムに参加してみたいかと思うのでしょうか。ただし、給与の税制については、みなし必要経費と基礎控除の38万円の金額が逆のような気がしますので、実際には、基礎控除の金額程度が業務に関係ある自己研鑽に関する支出として許容できる金額というのが実感かもしれません。この点についての議論には深入りしません。個人的には、本来は戦後にシャープ勧告を受け入れて、給与所得者も確定申告をするような仕組みを作った方が、税金や給与と必要経費についての意識が高まって良かったのではないかと思います。

余談ですが、研究予算が十分ではない時に、研究発表会に私費で参加する場合には、休暇を取得するというようなことを以前の職場で行っていました。しかしながら、税制的には200万円程度の必要経費の支出が可能なのであれば、私費で研究発表会に参加しても、必ずしも休暇を取得することがないのかもしれないとも思いました。大学等で有給休暇の消化が少ないことを背景として慣例で行われてきたことではあると思いますが、見直しの必要があるかもしれません。

## 水辺からのメッセージ No.38

国土文化研究所 特任研究員 岡村幸二 (JRRN 会員)

年間 1400 万人が癒される:

「公園造園力」とは公園の特質を踏まえ、財源や歴史性、市民ニーズに十分配慮すること



撮影：2012年4月（東京都千代田区日比谷公園）▲歴史的石垣と心字池

### ◆日比谷見附跡を活かした日本的洋風公園

いつの時代にも公園の存在は都市生活にとって欠かせないものです。日比谷公園には日比谷、霞が関からの利用者動線が四方八方に延びていますが、江戸初期の石垣が見える日比谷見附跡のある有楽門には、歴史的意味が感じとれます。江戸以前には、日比谷入江と呼ばれる入江が大手町まで広がっていました。

※国土文化研究所は、株式会社建設技術研究所のシンクタンク組織です。

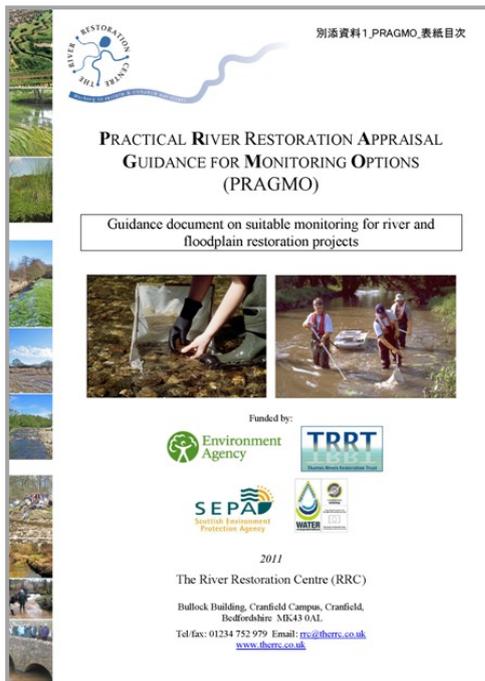
### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

## 研究・事例紹介

### 英国に学ぶ河川再生 ～ 河川モニタリング調査手引き「PRAGMO」のご紹介

河川再生に関わる諸外国の取組みとして、英国河川再生センター(RRC: **River Restoration Centre**)より2011年11月に発行(無料公開)されました河川再生モニタリング手引き「PRAGMO: Practical River Restoration Appraisal Guidance for Monitoring Options」をご紹介させていただきます。



PRAGMO 表紙

#### <目次>

1. 目的
  2. 本書の要約と利用方法
  3. 背景 (モニタリングの必要性)
  4. 再生目標の設定
  5. 物理環境と生態環境の関係性
  6. モニタリング目標の設定
  7. 相応しい技術と方法の選定
  8. モニタリングのタイムスケール
  9. モニタリング費用の算定
  10. 既存データと不足データの把握
  11. 国内外事例紹介 (6 河川)
  12. 参考文献
- 付録資料 (Appendix1-14 約 200 ページ)

本手引きは、河川及び氾濫原の再生に向けた目標設定や現場での様々な調査(モニタリング)の方法を入門書として分かりやすく解説したもので、主な特徴は次の通りです。

- 読者対象は政府機関から市民団体まで、河川再生に携わるすべての参加者を想定している。
- 本書を利用することで、河川再生の担い手が、河川の規模や特徴に応じたモニタリング計画と手順を策定し、また各手順における具体手法や注意点などを理解できる。
- 河川再生の中でも、特に生態学と水理・水圏環境のモニタリング要素を中心に記述している。一方、同様に重要な社会・経済環境に関わるモニタリングについては本書では扱わず、今後のテーマとしている。
- 本篇(約120ページ)は理念や手順を中心に記述され、付録資料編(約200ページ)では調査の具体的な手法が記載されている。
- 英国河川再生センター(RRC)が10年以上に渡り蓄積してきた知見や、現地調査時のチェックリスト等のツールなども含まれている。
- 完成版ではなく、「Living Document」として、新たな知見や情報を継続的に加えながら更新をしていく。
- 原本(英語版)は以下よりダウンロード可能。  
[http://www.therrc.co.uk/rrc\\_pragmo.php](http://www.therrc.co.uk/rrc_pragmo.php)

日本においても、河川再生の目標設定やモニタリング調査に関わる指南書がこれまで出版されてきましたが、こうした既存書籍等も活用しながら、各河川に相応しい再生計画の立案や調査活動へ発展していくことを願っています。

なお、来月号(2012年8月号)では、「マレーシアに学ぶ河川再生」と題して、マレーシアで昨年発行された住民参加型河川再生ハンドブックをご紹介させていただきます。

(JRRN 事務局・和田彰)

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■『平成 24 年度 多自然川づくり研修会—第 1 回 東予地区』(7/21 開催)

JRRN 会員である「鞍瀬塾」様より、愛媛県内で 7 月に開催される「H24 多自然川づくり研修会」のご案内を頂きました。

- 日時：2012 年 7 月 21 日 (土) 10 時 30 分から
- 会場：愛媛県西条市丹原町文化会館 2 階第 1 会議室
- 主催：鞍瀬塾 他
- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/667.html>

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■「河川文化を語る会」

JRRN 団体会員である公益社団法人日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

**【第 169 回】 ※定員に達したため申込受付は終了**

- ◆テーマ：「東日本大震災で考えたこと～400 万人が住む東京・名古屋・大阪のゼロメートル地帯が危ない～」
- ◆講師：青山俊樹 (あおやま としき) 氏 (公益社団法人 日本河川協会 理事)
- ◆日時：2012 年 7 月 23 日 (月) 18:00～20:00
- ◆場所：厚生会館 (全国土木建築健保) (東京都千代田区)
- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/564.html>

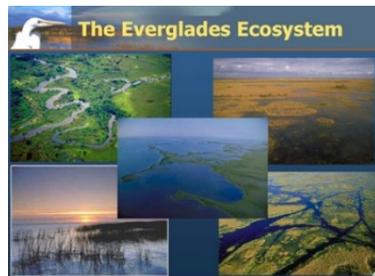
**【JRRN 会員からの提供情報】**

■「アメリカ合衆国フロリダ州エバーグレイズ湿地復元計画の EPA 承認」に関する報道記事紹介

JRRN 個人会員の (株) 日建技術コンサルタント・益倉克成様より、「アメリカ合衆国フロリダ州のエバーグレイズ湿地の州の復元計画が EPA によって承認」に関する報道記事 (日本語訳) を御提供頂きました。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/672.html>

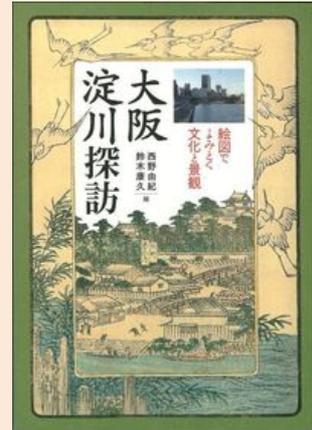


**【JRRN 会員からの提供情報】**

■『大阪 淀川探訪—絵図でよみとく文化と歴史』新刊案内

JRRN 団体会員「カップ研究会」の鈴木康久様から新刊書籍をご紹介頂きました。

江戸時代の淀川ガイドブック『淀川兩岸一覽』の美しい挿絵をカラーで紹介・解説、「名所図会」や古い絵はがきなどから各時代の変遷を見て迎えることができます。



◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/626.html>

**【JRRN 会員からの提供情報】**

■『隅田川市民交流実行委員会 2012 年事業』ご紹介

JRRN 団体会員「隅田川市民交流実行委員会」糸井様より、平成 24 年度(2012 年)事業のご紹介を頂きました。

隅田川市民交流実行委員会 平成 24 年度(2012 年)事業 平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日	
3 月	● 総合-社会福祉委員会(27 日) 西条 大塚家康(長崎県 4 期) 第 1 期 講座 15:00～18:00 25 年度福祉 24 年度事業報告 定例会議 15:40～16:40
	● 講座 小島 正之氏 筑波大学大学院 教授 テーマ「震災から見た防災と危機管理」 ～防災・アオキ大塚家康氏の思い出～
3 月	● 第 3 期 定例会 18:00～19:00 (議決会費 3000 円)
4 月	● 隅田川市民交流実行委員会 第 12 回(30～31 日) 第 2 期事業報告 ● 隅田川市民交流実行委員会 第 13 回(31 日) 第 3 期事業報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 1 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 2 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 3 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 4 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 5 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 6 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 7 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 8 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 9 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 10 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 11 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 12 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 13 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 14 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 15 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 16 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 17 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 18 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 19 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 20 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 21 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 22 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 23 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 24 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 25 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 26 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 27 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 28 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 29 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 30 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 31 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 32 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 33 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 34 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 35 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 36 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 37 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 38 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 39 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 40 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 41 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 42 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 43 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 44 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 45 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 46 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 47 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 48 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 49 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 50 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 51 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 52 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 53 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 54 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 55 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 56 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 57 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 58 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 59 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 60 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 61 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 62 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 63 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 64 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 65 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 66 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 67 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 68 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 69 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 70 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 71 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 72 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 73 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 74 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 75 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 76 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 77 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 78 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 79 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 80 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 81 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 82 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 83 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 84 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 85 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 86 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 87 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 88 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 89 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 90 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 91 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 92 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 93 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 94 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 95 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 96 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 97 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 98 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 99 期(31 日) 発行委員会報告 ● 新刊『淀川探訪』発行委員会 第 100 期(31 日) 発行委員会報告

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/662.html>

**【海外からの提供情報】**

■「RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (Bulletin)」ご紹介 ～2012 年 5 月号

RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (2012 年 5 月号) を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、英国における最新の河川再生事例の話題、RRC が実施中の河川再生事例情報蓄積活動、また河川再生に関わる行事案内などが紹介されています。

◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/588.html>



## 会議・イベント案内（2012年7月以降）

### （JRRN/ARRN 主催・共催の会議・イベント）

- **JRRN ワークショップ「英国に学ぶ河川再生～PRAGMO を活用した河川モニタリング」（仮題）開催！**  
PRAGMO 日本語翻訳版の発刊を記念し、英国河川再生センター(RRC)幹部を講師に招き、PRAGMO を活用した河川モニタリングに関わるワークショップを開催致します。（平成 24 年度河川整備基金助成事業）  
○開催日（予定）： 2012 年 12 月 1 日（土）午後 ○開催場所： 東京都内

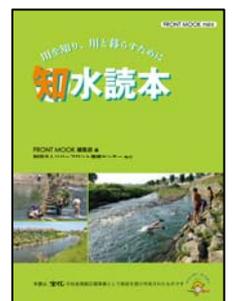
※本行事の詳細が決まり次第、JRRN ウェブサイト及びニュースレター等を通じてご案内いたします。

### （河川再生に関する主なイベント）

- **国際河川修復短期研修(P12 参照)**  
○日時：2012 年 7 月 4 日(水)～5 日(木) 9:00-16:00  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1427.html>
- **沖縄における河川の自然再生とワイズユース**  
○日時：2012 年 7 月 13 日（金）～7 月 14 日（土）  
○主催：応用生態工学会  
○場所：浦添市てだこホール市民交流室 他  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1444.html>
- **河川生態系の多様性と管理**  
○日時：2012 年 7 月 13 日（金）15:00～17:00  
○主催：埼玉大学・応用生態工学会東京  
○場所：埼玉県さいたま市 埼玉大学  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1482.html>
- **平成 24 年度 多自然川づくり研修会(P12 参照)**  
○日時：2012 年月日（）xx:xx～xx:xx  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1476.html>
- **河川生態系の統合：基礎的研究と管理のための応用**  
○日時：2012 年 7 月 21 日（土）14:30-16:30  
○主催：大阪府立大学大学  
○場所：大阪府立大学中百舌鳥キャンパス  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1492.html>
- **第 169 回 河川文化を語る会『東日本大震災で考えたこと～400 万人が住む東京・名古屋・大阪のゼロメートル地帯が危ない～』（P12 参照・申込受付終了）**  
○日時：2012 年 7 月 23 日（月）18:00～20:00
- **第 17 回水シンポジウム 2012 in ぎふ**  
○日時：2012 年 7 月 26 日（木）～27 日（金）  
○主催：第 17 回水シンポジウム 2012 in ぎふ 実行委員会  
○場所：岐阜市文化産業交流センター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1480.html>
- **ふるさと再発見！旭川源流大学**  
○日時：7 月 29 日（日）10:30-13:30  
○主催：旭川源流大学実行委員会  
○場所：旭川河口の高島東部の干潟  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1478.html>
- **東京の川を考えるシンポジウム 2012**  
○日時：2012 年 7 月 31 日（火）13:30～16:30  
○主催：東京都建設局  
○場所：都庁都民ホール（都議会議事堂 1 階）  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1436.html>
- **第 5 回 いい川・いい川づくりワークショップ**  
○日時：2012 年 9 月 22 日(土)～9 月 23 日(日)  
○主催：いい川・いい川づくり実行委員会  
○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1446.html>

## 書籍等の紹介

- **アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.2 (2012.2 発刊)**  
・発行：アジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN)  
・監修：ARRN 技術委員会  
・編集：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)  
・価格：無料
- ※本冊子の入手方法  
本手引きをご希望の方は、JRRN 事務局までご連絡ください。なお、JRRN 会員限定サービスとさせて頂き、送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。非会員の方は、JRRN 会員登録後にお申込下さい。  
[info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) / 電話：03-6228-3862
- **川を知り、川と暮らすために 知水読本 (2012.3 発刊)**  
・発行：公益財団法人リバーフロント研究所  
・内容：「河川・技術・環境・暮らし」をキーワードに、「人」と「川」との来し方行く末を見据えながら、河川・水辺という地域資源の利用のあり方や、治水と生態系保全を両立させる水辺環境整備などをわかりやすく解説しています。  
・価格：無料（本書は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成）※在庫数：極少  
・問い合わせ先  
リバーフロント研究所 企画 G  
担当：後藤 TEL:03-6228-3860



# 会員募集中

## ■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。  
 市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、  
 所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご  
 参加を歓迎いたします。

## ■ 会員の特典

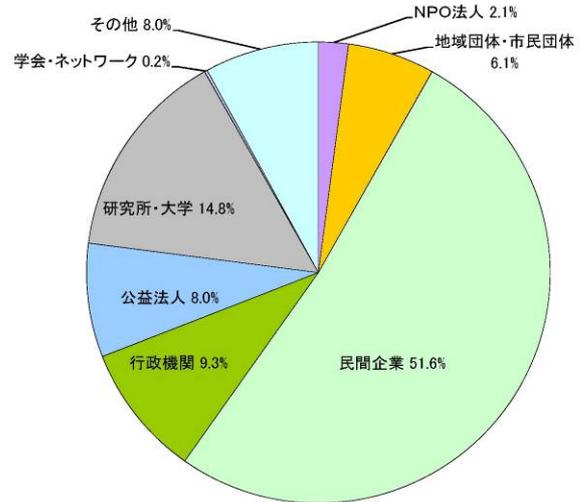
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を  
 ご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

## ■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2012年6月29日時点の個人会員構成  
 (個人会員数：561名、団体会員数：46団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

## 【発行・問合せ先】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局  
 公益財団法人リバーフロント研究所 内  
 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階  
 Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

